

筆者あとがき

約四年に渡り、『経済同友会七十年史』の原稿を執筆した。作業を通じて、経済同友会の様々な提言や活動を吟味する中、どんな時にも経済同友会が一番に模索したものは、経営者の立場から「国を思い、社会を思う」姿勢だった、ということを変更して思い知らされた。

改めて、というのは、筆者が読売新聞の経済部財界クラブ担当だった一九九二年当時のことを思い出したからだ。当時の経済同友会の代表幹事は速水優さん。私が財界担当を一年余り務めた後、ガットのウルグアイ・ラウンドで大揺れの農水クラブに担当が代わることになり、速水さんに挨拶すると、「君、お国のためだぞ。頑張ってくれ」と檄を飛ばされた。

随分と大げさな言葉のように思えるが、当時は日本のコメ自由化問題も絡んで、世界の自由貿易体制が揺るがされかねない状況だっただけに、普段は笑みを絶やさない速水さんの表情は真剣そのものだった。

それから五年余り。九七年から九八年にかけて日本銀行の次期総裁の取材合戦が過熱する中、我々は社内で作成した候補リストから、最終的に速水さんの名前を外した。当時で七十二歳。とても日銀総裁の激務は務

まらないと思つたからだ。だが、とある日の夕刻、通信社が「速水総裁」を打ち、残る全社が後追いする結果となった。

山一證券破綻など、失われた一〇年のピーク時に、速水さんは体に鞭打って、まさに救国の意気込みで大役を引き受け、ゼロ金利政策など苦悩の選択を迫られる日銀の指揮をとり続けた。先の発言の「お国のため」は、決して大げさではなかったのだ。

経済団体のメンバーという域を超えて、「公」のために行動してきた経済同友会の面々は、速水さんだけではなく、数え上げれば限りがない。自身や周囲への影響を恐れずに小泉首相に毅然と靖国参拝の自粛を求めた北城恪太郎さん。地方の経済界からの「苦情」を受けながらも持論を通し続けた品川正治さん。大病をおして記者会見に臨んだ轉法輪奏さん。

「世の中」を思うあまりの、経済同友会内部での論争も多くあった。市場主義をテーマにした「舞浜会議」での主張の対立。地球環境問題で提言に国別目標を盛り込むかどうかの激論。内輪の話では、代表幹事の選出方法を巡る迷走も興味深かった。また、経済同友会時代の平岩外四さんや石川六郎さんたちの若かりし日の考え方などにも触れることができ、その後の平岩さんらを目の当たりにした私にとっては個人的な意味で参考にもなった。

私事だが、今回の執筆作業をしている間に六〇歳の定年を迎え、現在は再雇用期間に突入してしまつた。長年の経済記者生活の総仕上げに、今回の仕事を与えてくれ、しかも様々な面で支えてくれた経済同友会と中央公論新社の関係者の方々に深く御礼を申し上げる。特に私の文章を最も丹念に校正して下さつた南部鐵

也さん、安生徹さん、神山郁子さんには頭が下がる。安生さんは綿密な直しを全七章中六章まで頂いたところで亡くなられた。ただただ、ご冥福を祈るばかりだ。

ところで、『七十年史』のうち、経済同友会の創設から三〇年分は、一九七六年に刊行された『経済同友会三十年史』の文を加筆、整理した。三十年史を書かれた羽間乙彦さんは「筆者あとがき」の中で、「五十年史を書くべき人は、今どこで何をしているのであろうか」と書かれている。今回、七十年史を書いた私は、三十年史発刊の頃は大学受験に失敗して浪人中で、東京駅のあたりも毎日のようにウロウロしていた。羽間さんともすれ違ったかもしれない。経済同友会は現在、組織の未来像を真剣に研究、検討している。その結果、誕生する「新生」同友会が、創立から一〇〇周年を迎える時、一世紀に渡る「迫力満点の経済ドラマ」をまとめるといふ大役を託される幸せ者も今、どこかにいるはずだ。

二〇一六年一〇月

重田育哉